

承前

「S-3が、再び現われました！ 場所は東京駅付近です」

六車参事官の報告に、林公安部長は書類から顔を上げた。このところ、ショッキングな報告ばかりが相次いでいるため、何を聞いても驚かないアパシーのような状態が常になっていた。

「前と同じやつか？」

「はい、まちがいはなく吉村真二郎です。非番の警察官が遭遇したのですが、死亡する前に奇跡的に姿を撮影し、送信してきました」

六車参事官は、写真を引き伸ばしたプリントアウトを机の上に置いた。

空中に浮いた男の姿が映っている。ちらりと見て、林公安部長は全身に鳥肌が立つのを感じた。全体にぼつちやりとして、いかにも風采が上がない若者だったが、いっばいに見開かれた目は異様な光を放ち、十字架にかけられたキリストのように両腕を拡げながら、妙な角度で首を傾げている。

こいつはもう、この世の住人じゃないと思った。こいつの目に映っている世界もまた、我々が見ているのとは似て非なるものに違いない。こいつの自己イメージは、おそらく、神か悪魔のような異形の存在なのだろう。こいつの心はきつと、冷血動物のように異質で理解を絶するものだから……。

「ただちに前回策定した作戦を実行したいと思えますので、ご許可をお願いします」

六車参事官に空想を破られ、林公安部長は、眉根を寄せた。

「手塚不律のマークを最優先にすることだったな。しかし、早急にS-3の迎撃をしなれば、被害が拡大する一方ではないのか？」

「やむを得ません」

六車参事官は、ただの一言で斬り捨てる。

「すでに自衛隊が出勤していますが、超能力者たちの協力がなければ、どのみちS-3を殺処分することは困難です。それに、S-3は自然災害のようなものですから、いずれは自滅しますが、手塚不律は永続的な脅威です。世界会議のことを考えれば、むしろこれを奇貨として、超能力者たちの根絶計画をここで前進させるよりありません」

他に選択肢はなさそうだ。林公安部長は、腕組みをして考える。

いづれにせよ、乾坤一擲の大勝負になる。もしこちらの意図を感じかれたら、たちまち超能力者たちの矛先を向けられて、東京は——いや、日本は壊滅するだろう。そうならないよう細心の注意を払いながら、やつらを殺し合わせなくてはならない。

危険な綱渡りというより、まるで蜘蛛の糸を上っていく韃陀多のような心境だった。

「今でも、S-3は、反手塚派の超能力者たちのでっち上げだと思おうか？」

林公安部長は、六車参事官を見やる。

「その可能性が、一番高いのではないかと」

六車参事官は、慎重な言葉遣いで返答した。

「その場合、我々は、反手塚派の作戦に乗るべきと考えます。何はともあれ、手塚不律を殺すこ

とこそ、最優先にすべきでしょう」

残った超能力者たちをどうするのかというのが、大問題だが。

「では、もしそうじゃなかったら？」

「たいして変わりません。やはり、しばらくS-3を泳がせても、手塚を仕留めなくてはなりません」

六車参事官は、ぶれなかった。

「なるほど。それは、そうかもしれない。しかし、もう一つ、さらに大きな問題がある。例の、橋本・アツペルバウム症候群の少女だ」

「小早川亜唯子ですね。もしもS-3が東京に出現したことを知ったら、こちらにやって来る可能性は充分あると思います」

六車参事官は、うなずいた。

「世界会議は、彼女を、S-3や魔王子たち以上に深刻な脅威と見なしている」

林公安部長は、つぶやくように言った。日本の立場で考えれば、そうではない。むしろ、小早川亜唯子の力を借りて吉村真二郎を殺すことができれば、被害は少なくなるだろう。だが、世界を牛耳っているやつらは、東京の住民が全滅したところで痛くも痒くもない。彼らが恐れているのは、橋本・アツペルバウム症候群によって地球規模の異変が発生し、それが自分たちの国にまで及ぶことなのだ。

理不尽だとは思うが、核攻撃を行うとあからさまに恫喝されている状況下では、彼らの意向を最優先にせざるを得なかった。

「八木の部隊は、すでにいつでも出動できる状態ですが、S-3よりも、手塚不律の方を目標としています。……しかし、それよりさらに高い優先順位ということですね？」

六車参事官は、沈鬱な表情だった。どうやら、同じことを考えているらしい。

「ああ。もしも小早川亜唯子を発見した場合は、手塚不律ではなく彼女の殺害を最優先にせよと伝えてくれ」

林公安部長は、目眩がしていた。いったい何がどうなった場合に、一番望ましい結果が得られるのだろうか。

小早川亜唯子、手塚不律、吉村真二郎の三人がすべて死亡し、他の魔王子たちも全滅に近い大打撃を受ければいいのだが。

しかし、そうなるためには変数が多すぎて、どんな手を打ったらいいのかもわからない。

つまるところは、神頼みしかないのだろうか。とりあえずは、見えざる神の手が彼らを一掃してくれることを祈る以外に、やれることはなさそうだった。

「どういうことだ？ いったいどうして、吉村を取り逃したんだ？」

手塚不律は、取り巻きたちを見渡しながら低い声で唸った。全員すっかり縮み上がっており、答える声はなかった。

「罨に掛けたはずなのに、なぜ殺せなかった？ やつは、本当にムサベツになったのか？」
重ねて問いかけると、ようやく、モグラのような影が短い前肢で挙手する。

「本当にムサベツになったんなら、途中で殺しを止めることはできないはずですよ。だから、ちょ

つと前までは、嘘だと思ってました。渋谷の魔王王子たちが、ヨシムラを操ってる……」

「前までは？」

不律は、眉を上げた。

「今は違うのか？」

「別の可能性が見えてきたんです」

ノナは、ぱっちりとした緑色の目で、不律を見た。つい昨日までは眼は一つも存在していなかったが、功績が認められ、不律に片目だけ与えてもらったのだ。人間だったときと同じように、チャーミングな目を。

「……ヨシムラは、サビーナと一緒にいました。サビーナは、戦いは得意じゃないけど、人を癒やすことができます。特に、心の傷を癒やして、元通りにできる。だから」

不律は、考え込んだ。つまり、ムサベツに堕ちて人殺しへの欲求と破壊衝動に駆られていた人間を、サビーナは元に戻すことができたということなのか。

「サビーナは、どうした？ 逃げたのか？」

だとすれば、あの女を確保しておけば、役に立つかもしれない。

「サビーナ……死んだ」

ノナは、無感動に言う。

「撃たれて殺されたんです」

「どうして、そんなことがわかる？ 死体はまだ、確認されてないんだろう？」

東京駅の日本橋口付近は、まだ、ビルの瓦礫や燃えた車、無数の死体が散乱した状態のはずだ

った。

「わかります。……わたしの、お姉さんだから」

ノナは、それだけ言って口をつぐんだ。

とても嘘をついているようには見えなかった。ノナは、自分の身体を人間に戻せる——あるいは近づけることができるのは、俺だけだと知っている。だから、姉も吉村も平気で裏切った。今さら、そんな嘘をつくはずがない。バレたときには、どんな恐ろしい事態が待っているか、百も承知だろう。

つまり、今の吉村は、ふつうのムサベツということになる。自滅するまでは、ひたすら殺して殺して殺しまくることがだろう。

「よし、じゃあ、あのキモデブを駆除しに行こう」

不律は、陽気に宣言する。

「うまくいけば、念動力を奪って、この世で最も惨めな生き物にしてやる。おまえたちに死ぬまで仕えるしかない、肥溜めの大腸菌以下の存在だ。殺人衝動は残してやってもいい。身体の内と外から苛まれながら自然に干からびていき、燃え滓かすのようになるところを見てやろうじゃないか」

不律が床を指すと、スツールの形をした大宮おおみやが、六本の肢でちょこまかとやってきた。不律は、大宮に腰掛けて、もう一度、取り巻き全員を見回す。

すると、ウミケムシにそっくりな山口やまぐちが、たどたどしい発音で発言した。

「危ない……危ない。騙だまされるな。騙だまされるな。騙だまされるな。騙だまされるな」

「何が危ないんだ？」

「……渋谷。渋谷渋谷。魔王子魔王子魔王子」

山口は、心から俺の身を案じているらしい。不律は憫笑する。俺の身に万一のことがあれば、一生あのままの身体なのだから、それも当然かもしれない。

だが、山口に考えさせるのは、酷な話だろう。今の身体に変えるときに、デザイン上の問題から、脳容積を大幅に減らしてしまったのだから。

「怜央たちが、俺を待ち伏せしてるんじゃないかって心配してるのか？ 心配は要らない。もちろん、待ち伏せはしてるさ！」

不律は、大声で笑った。

「俺の命を狙ってるやつらは、他にもいろいろいる。全員、俺がムサベツ退治に専念していると、きが千載一遇の好機だと思って、襲ってくるだろう。……だがな、何人いようと、俺を殺すことなどできない。まとめて掃除してやるよ」

すると、取り巻きたちが、いつせいに追従笑いをした。ゲログロという蛙の鳴き声や、虫の声、鈴を転がすような女の声などが入り交じって、奇妙なオーケストラになる。

不律は、立ち上がった。そのときふと、今まで感じたことのない不安が兆すのを感じる。怖いものなど、何もないはずなのに。

なぜか、ずっと前にメールを送っただけの少女のことを思い出していた。……たしか、亜唯子とか言ってたっけ。

だが、すぐに身体に力が満ちあふれ、戦いのアイデアが泉のように湧き出してきた。

足先から頭のとっぺんまで、激しい武者震いが走る。

ようし、ゴングだ。

不律は、両の拳を胸の前で握り、戦いの場に向かって歩き出した。

「逃げよう」

龍司は、切羽詰まった表情で言った。美歩は、黙って龍司の顔を見ていた。

「何だよ？」

「いっつも、それしか言わないね」

龍司は、美歩の言葉に腹を立てたようだった。

「それしかって、何だよ？　そういう状況が多かったってだけだろう？」

「逃げるのが好きだけじゃない？」

「あんなあ……！」

龍司が美歩に食ってかかろうとしたとき、春彦が、前方を指差した。

「やっぱ、逃げるのが正解みたいだな」

全員の視線が、春彦の指の先に集中した。大勢の人間が、こちらに向かって早足で歩いてくる。どうも様子がおかしいと、美歩は思う。東京都の防災放送で、また悪鬼が現われたのは知っていたが、近づいてくる人々は、命からがら逃げ出してきたような感じがしないのだ。

背広が破れ、頭からコンクリートの白い粉を浴びているサラリーマンや、パンプスの踵が取れてびっこを引いているOLたち。チャライ服装をしたホスト風の男や水商売風の女、制服警官まで交じっているが、みな、競歩でもしているように黙々と歩いてくる。

「逃げるぞ！」

春彦が叫び、彼らとは逆方向に走り出した。わけがわからないまま、美歩と龍司、マコちゃんが続いた。

「どうしたの？ あの人たちは、何？」

息を切らしながら美歩が訊ねると、春彦は、後ろに顎あごをしゃくった。

「あ……！」

こちらから向こうに向かって歩いてきた中年男性が、ちょうど、やってくる集団に行き会ったところだった。

中年男性は道を譲ったが、すれ違うのかと思いきや、集団は中年男性に襲いかかった。殴られたり蹴られたりして倒れた中年男性を、なおも執拗しつように踏みつけ、蹴り続けている。中年男性のメガネが割れ、血が流れているのが見えた。

「どうして？ あの人たち、何なのよ？」

美歩は、我知らず悲鳴を漏らしていた。すると、それを聞きつけたらしく、集団は足を速めた。もはや、皇居前をジョギングするような速度で向かってくる。

「しかたないな」

春彦は、そうつぶやいて、前に出た。

突風——台風でもあり得ないくらいの烈風が、こちらにやってくる集団を襲った。

たちまち、先頭の数人が空高く舞い上がり、続いて、第二集団が吹き飛ばされる。

ところが、なぜか、集団はいつこうに意に介した様子がなかった。それまでにも増した速度で、

こちらに向かって殺到してくる。

「懲りないやつらだ」

春彦は、ボウリングをするような身振りをした。

すると、舞い上がっていた人間たちが地上すれすれの高さをミサイルのように飛んで、やって来る集団に激突する。

「ストライク！」

春彦は、つぶやく。ぶつかった人間たちは、見事に弾き飛ばされて転がった。おそらく、全員が致命傷を負ったことだろう。

「やめて！ 何してるの？」

美歩は、春彦の腕に手をかけて揺さぶった。

「どうしたの？ それじゃあ、やってることは魔王子たちと同じじゃない！」

「同じじゃないよ」

春彦は、無表情に美歩を見返す。

「俺はただ、身を守ってるだけだ。ここにいる全員のな」

「でも……何も、そこまでやらなくても」

「そこまでやっても、やつらは止まらないんだ」

春彦の視線を追って、美歩は息を呑んだ。あれだけ多くの人たちが^な薙ぎ倒されたというのに、後続の集団はなおも殺到してくる。

「よくわからないが、あいつらはマインドコントロールを受けているみたいだ」

逃げ足の速い龍司が、美歩の後ろから言う。

「催眠術みたいなの？」

美歩が振り返って訊ねると、龍司は首を振った。

「そんな生やさしいもんじゃない。誰か、たぶん、超能力で心を操る方法を見つけたんだ」

美歩はぞっとした。本当にそうだったなら、操られた人間は、本人の意思にかかわらず、生きながら奴隷のように動かされるのか……。

「たぶん、やつらは元には戻らない。つまり、ゾンビになったのと同じだ」

春彦は、手塚不律を思わせるような冷たい声音で言う。

「……だから、こうするしかないんだ」

さつきとは比較にならないほど猛烈な突風が、近づいてくる集団を迎える。

ジェット気流のような空気の塊は、道路上に散乱している瓦礫や死体などを巻き上げ、集団を捉える。風は、研磨剤を含んだ高圧洗浄機の水流のように人体を削り、ずたずたに引き裂いた。

血煙色の砂嵐が彼方に去った後は、路上に残っているものは何もなかった。

(つづく)